

齋藤 奏『アフリカにおける貧困の解決策』

アフリカの貧困は大変深刻な問題であり、私たち日本人の日常生活とも食糧の輸出入などで密接に結びついているにもかかわらず、“どこか遠い国の話”であり、なかなか自分の問題として捉えられないという傾向があるように思います。近年の学生さんの問題意識の傾向として、自分の身近な問題にしか関心をいだかない“身近主義”が指摘されていますが、学生に限らず評者の私自身も、マスコミを通じてある程度の知識を持っていても、実際に自分の問題として受け止めたり、行動を起こしたりするところに至っていないということを、正直に認めざるを得ません。

筆者の齋藤さんは、あえてこの問題を取り上げました。“身近主義”の傾向にもかかわらず、あえてこの種の問題を取り上げていることに、筆者の思いの深さが伝わってきます。

「はじめに」で述べられているように、筆者はケニアを訪れ、貧困問題の深刻さを痛感し、あわせて日本とのつながりも理解しました。「私はケニアへの旅を通して、改めて貧困問題を解決しなければならないと実感した。」「世界の貧困問題は、先進国である日本と大きく関わっているのである。…私たち日本人には、貧困問題を解決する義務と責任があるのである。」 深刻な問題から眼を背けることなく、自らの問題として受け止め、正面から取り組もうとする筆者の姿勢は、実に若者らしい正義感にあふれ、読者にすがすがしい共感を与えてくれます。

何かを研究する際に、自らの原体験が大きな動機（ばね）となることがあります。この論文の場合は筆者がケニアを訪れたことが原体験ですが、ケニアのある小学校でエイズ教育の現場に遭遇した場面（8ページ）は、特に筆者に強いインパクトを与えたようです。筆者自身の体験に基づく話は、他文献の引用といった「二次情報」に比べて価値の高い「一次情報」であり、それだけ読者への説得力を強めることになります。

もうひとつ、この論文の長所を挙げるとすると、「専門家の意見」を紹介した後で「筆者の意見」としていくつもの具体的な解決策を提示していることです。この「具体的な」というところが大事で、具体的な解決策を示すにはまず現状をよく知ることが必要となります。統計資料も駆使しながら問題点を明らかにしたうえで、現実的な解決策を一生懸命考えていること、ハリウッド女優やマクドナルドなどの事例を紹介していることも、説得力を高めるうえで非常に効果的だと思います。

この論文は、筆者のケニア訪問が執筆の動機となりました。しかし、アフリカを訪れる人はきっと多くはないでしょう。アフリカの貧困問題が多くの人々の関心事になるには、いかなる働きかけが効果的なのか。筆者も様々な提案を出してくれていますが、公共マーケティングの重要なテーマとして評者の私も、これから真剣に考えていきたいと思います。